

## アメリカの“filthy modern tide” ——南部の新批評についてのモダニティと W・B・イエイツ

諏訪 友亮

### 1. はじめに —— イェイツ、世界文学

デイヴィッド・ダムロッシュ (David Damrosch) による世界文学像の一つの特徴は、ある文学作品が生まれた元の文化 (source culture) と、その文学が受け入れられる先の文化 (host culture) を分け、それぞれの文脈を丹念に調べ、相補的に作品を理解しようとするところにある。とりわけ受入文化における国民の伝統、受入文化側の作家たちによるニーズによって元の作品の意味がどう変化しているか、どう屈折しているかに注目するのだが、ダムロッシュはそのようなねじれを彼独特の比喩である楕円と形容する。すなわち、円である作品が2つの極点、元の文化と受入文化に引っ張られて伸び、楕円を描くと言うのだ。

しかしながら、正円になるような一切のズレがない作家の受容などはそもそも存在するのだろうか。世界文学研究は認識論的に国境を前提として一つの国民文化と別の国民文化を想定し、その両者の間で比較するという方法を取らざるを得ないが、前者から後者へ作品が移動する際に屈折が起こるとするのは比較的分かりやすい。異なる言語、民族、地域を経ることで、元にあった意味がある程度失われ、受入先で新たな意味を得るということである。だが、ダムロッシュの世界文学論が暗に仮定している、国民文化内における作品の理解は屈折しないという観点は、例えばアイルランドにおいては当てはまらない。本稿で扱う W・B・イエイツ (W. B. Yeats) は、国内で時に激しく拒絶されてきた<sup>1</sup>。むしろハロルド・ブルーム (Harold Bloom) の「影響の不安」モデルに従えば、このモデルがあらゆる文化的側面を無視した形とはいえ、先行する作家は後続の作家たちによって、同一文化内であっても常に誤解され続けることになる (Bloom 7-16)。イエイツに限って言えば、国外よりも国内の方が受容のねじれは大きいと見える可能性もある。

未だに拡大し続けている世界文学批評にこうした不十分さがつきまとうものの、イエイツの正典性 (canonicity) を読むうえで、アイルランド外の地域における彼の受容を考慮することが有用な視座を提供してくれるのは確かである。ダムロッシュによれば、“works become world literature by being received *into* the space of foreign culture, a space defined in many ways by the host culture’s national tradition and the present needs of its own writers. . . . World literature is thus always as much about the host culture’s values and needs as it is about a work’s source culture . . .” (283; emphasis in original). イエイツのような、実際のところ国内ではあまり研究対象にならず、むしろ国外でよく読まれ研究されている作家の正典性を考察するには<sup>2</sup>、国境の外側でどのようなニーズのもとに読まれているのかを常に検討する必要があるだろう。W・H・オーデン (W. H. Auden) がイエイツの死後の受容を指して、“Now he is scattered among a hundred cities / And wholly given over to unfamiliar affections, // And be punished under a foreign code of conscience” (Auden 247) と書いたように、彼はアイルランド国外でこそ適切な読者を得ると言えなくもない。

イエイツを熱心に読んでいた国外の読者グループの一つが、本稿で論じるアメリカ南部の詩人たちである。彼らの間では、「伝統」という概念を文学批評へ持ち込んだ T・S・エリオット (T. S. Eliot) に畏敬のまなざしが向けられていた一方で、イエイツにも同等か時としてそれ以上の評価が与えられ、そこにはアメリカ南部という場所の特殊性、反近代を標榜する南部白人 (White Southerners) としての自己認識が寄与していた。本稿では、アメリカ南部の作家たち、後に新批評 (New Criticism) と呼ばれたアメリカ文学界の一派のうち、とりわけクレアンス・ブルックス (Cleanth Brooks) とアレン・テイト (Allen Tate) に焦点を当て、彼らのどういった地理的・時代的条件および近代論がイエイツの読みを支えていたのかを考察したい<sup>3</sup>。

## 2. アメリカ南部詩人とイエイツ——担わされる反近代と伝統

イエイツはしばしば反近代を志向したとされる。イエイツ晩年の詩 “The Statues” にある一節 “filthy modern tide” は、近代という汚濁に流されるアイルランド人という表現から、イエイツによる近代批判の好例となってきた。

. . . What intellect

What calculation, number, measurement, replied?

We Irish, born into that ancient sect

But thrown upon this filthy modern tide

And by its formless spawning fury wrecked,

Climb to our proper dark, that we may trace

The lineaments of a plummet-measured face. (*Variorum* 611; 以下、すべての下線部は筆者による)

後年のイエイツにとって、混沌とした近代とはダブリンのオCONNELL・ブリッジで見た無秩序なネオンサインそのものであり、詩にある数学的な比率で計られた古代ギリシャの彫像、均整のとれた秩序と対立する。“When I stand upon O’Connell Bridge in the half-light and notice that discordant

architecture, all those electric signs, where modern heterogeneity has taken physical form, a vague hatred comes up out of my own dark . . ." (*Later Essays* 215). 近代という語は、イエイツの長いキャリアのなかで様々な意味を持ち、それに付随する産業主義、物質主義といったものは、初期の頃から彼にとってイングランドを表すものとして用いられもした。"To transmute the anti-English passion into a passion of hatred against the vulgarity and materialism whereon England has founded her worst life and the whole life that she sends us, has always been a dream of mine . . ." (*Autobiographies* 319). 前近代的な農村共同体を保持しているとイエイツが見なしていたアイルランド、古代のセクトに生まれ落ちたアイルランドは、そうしたイングランドの持つ近代性と分かりやすいほどの二項対立を成していた。

しかし他方で、イエイツにとって近代の要素は、決して負の意味だけを持つものではなかった。イエイツの詩 "Among School Children" の一節において、広々とした教室で小学生たちが身の回りを整理し勉強する様子は「モダン」で最善だと表される。

The children learn to cipher and to sing,  
To study reading-books and history,  
To cut and sew, be neat in everything  
In the best modern way. . . (*Variorum* 443)

モンテッソーリ・メソッドを採用し、他の劣悪な環境の小学校に比べてはるかに清潔で設備の整っていたこの学校を形容する「モダン」という言葉にネガティブな含意は見られない。同時期のイエイツの講演では、"The tendency of the most modern education, that in Italy, let us say, is to begin geography with your native fields, arithmetic by counting the school chairs and measuring the walls, history with local monuments, religion with the local saints, and then to pass on from that to the nation itself" (*Later Articles* 194) と述べ、イタリアの教育が「最もモダンだ」とし、ここでもモダンという語に皮肉の響きはない。結局のところイエイツはその人生の多くをロンドンとダブリンという都会で過ごし、彼のなかでその都市を基礎づけている近代は内面化され分裂していた。イエイツやエリオット、パウンド (Ezra Pound) ら英語圏モダニストがしばしば見せる反近代の姿勢は、詩語を排した口語詩、断片と引用に裏付けられた作品といった、彼らの極めてモダンな詩学によっても自己矛盾の様相を呈している。

そのようなイエイツにおける近代の二面性にも関わらず、イエイツの反近代の一面を察知し自らの批評に繋いだのが、アメリカ南部の詩人たちだった。彼らは個人的な親交で結ばれながら戦間期から戦後にかけてアメリカの批評界や大学において強い影響力を維持した。鉄道王の名が冠せられたテネシー州ナッシュビルのヴァンダービルト大学に集った彼らは、1920年代に出版した雑誌 *The Fugitive* をもとにフュージティヴ (「逃亡者」の意) と呼ばれる。主要メンバーは1930年代のアグレリアン (Agrarians)、第2次大戦以降の新批評家 (New Critics) に受け継がれ、なかでもジョン・クロウ・ランサム (John Crowe Ransom)、アレン・テイト、ロバート・ベン・ウォレン (Robert Penn Warren) はどのグループでも中心的な役割を演じている。この3つのグループ、フュージティヴ、

アグレリアン、新批評家は、時代背景や結集の意図も異なることから、彼らに繋がりを見ることに反対する論者はいるものの<sup>4</sup>、越智博美は3つのグループを連続体と見なしている<sup>5</sup>。実際アメリカ南部出身の主要メンバーらは、北部の大学で職を得て新批評家として活動してからも、南部人としてのアイデンティティを保持しており、彼らの著作集には南部についてのエッセイが必ずと言ってよいほど含まれている。

アメリカの主要大学でポストを得た新批評家たちは第2次大戦中からアカデミー内で勢力を増し、ウォレンとブルックスが作成した教科書 *Understanding Poetry* や *Understanding Fiction* などが大学の教科書として広く採用されるに及び、彼らのアカデミー内における権威は決定的なものになる。それはアメリカ国内に留まらず、戦後のアメリカの覇権とともに世界中の英文学科に輸出され、文学理論、批評史の始まりと言えはまず新批評を教えられ<sup>6</sup>、作品を取り巻く文脈を排除し作品を精読する新批評は、短い時間内で教えなければならない授業という枠組みに最適化されていたと言えるだろう。

伝記的知識、歴史的背景を排し、個人的な感情や意図を批評に反映することを誤謬として激しく拒否した新批評は、表向きは作家の伝記的事実を批評へ持ち込むことに反対していた。ブルックスの *Well Wrought Urn* の一章、イェイツの詩“Among School Children”を論じた箇所でも旧来の批評のそうした方法に不満が述べられている。

Our staple study of literature consists in investigations of the root system (the study of literary sources) or in sniffing the blossoms (impressionism), or . . . in questioning the quondam dancer, no longer a dancer, about her life history (the study of the poet's biography). (191)

文献学的に引用元を調べ、印象に基づいて論じ、さらに伝記的に読むことは、詩の本来の美しさ、詩の有機的な全体を経験できないというわけである。

にもかかわらずブルックスは後年、ウォレンとのやり取りのなかで、彼自身もイェイツにアイルランドという文化的背景を読み込んでいたことを認めている。

Where Yeats principally differed from his great contemporaries such as Eliot and Pound was in having a base in a backward-looking, traditional society which had hardly yet, as a culture, entered the modern world. . . . The southern writers in the 1920s were very much in Yeats's, had managed to preserve something of the wholeness, spontaneity, and concreteness of an earlier day and thus furnished the necessary other term for the dialectic – that is, passion as against intellection, poetry as against science, tradition as against modernity, an agrarian life as opposed to an industrial life. (Warren 118-19)

作者の伝記的背景を排除したはずの新批評家ブルックスが実はそれを前提にして文学テキストを読んでいた、そのことの矛盾は興味深い。新批評にとって背景を見ないという大原則を逸脱させるほどに、アメリカ南部とアイルランドの共振が魅力的であったのであり、イェイツ像が引き延ばさ

れ歪んでいただけでなく、彼ら自身もイエイツを通じて批評上の歪みを抱えていた。

イエイツがエリオット、パウンドと違い、過去を振り返る前近代的で伝統的な社会であるアイルランドに軸足を置いていたこと、それこそが1920年代の南部白人作家と近似しており、彼らは近代以前の一体性、外部に依ることのない自立、生活におけるすべてが抽象的ではなく具体を伴っていた状態を保護しようとしていたと主張される<sup>7</sup>。当時活動していたフュージティヴにとって、近代、科学、産業化は、伝統、詩、農村共同体とそれぞれ対立し、イエイツという存在は後者の守護者と映っていた。先述のように、彼らが評価するイエイツ後期の詩、例えば“Among School Children”においても、近代と詩は必ずしも相反していないにも関わらず、イエイツは古き良き前近代の共同体を守ろうとする詩人として理解されていた。新批評が隆盛しはじめる1950年代以前のエピソードとはいえ、2地域の密接な関係づけは彼らが作家の背景を評価基準にしていたことを物語っている。1920年代のフュージティヴとは、南部上流エリートからの逃亡であり、南北戦争によって失われる前の南部を懐古する態度からの逃亡を意味していたのだが、それとは裏腹に、フュージティヴでアグレリアンだったドナルド・デイヴィッドソン (Donald Davidson) は、自分たちがそうした南部の伝統の一部であったことを告白している<sup>8</sup>。このような南部白人作家による近代以前の社会の理想化にイエイツの反近代的な一側面がうまく適合し、彼らに受容されていたことになる。

アイルランドを表す“backward-looking”という語、過去を振り返る、進歩と逆行するというこの形容は、南部の詩人たちが自己を規定するために使った語と非常に近い。フュージティヴ、アグレリアン、新批評家のすべてに加わっていたアレン・テイトは、1945年のエッセイ“The New Provincialism”で南部を以下のように定義する。

With the war of 1914-1918, the South re-entered the world—but gave a backward glance as it stepped over the border: that backward glance gave us the Southern renaissance, a literature conscious of the past in the present. (Tate 545)

エリオットの *The Waste Land* と同じく、第1次大戦がそれまで欧米に存在した秩序を転覆してしまったという世界観のもと、“backward glance”「過去を振り返る」という行為こそが、1930年代まで続いたフュージティヴやアグレリアン、フォークナー (William Faulkner) らによる南部ルネッサンスという現象を起こした、テイトはそうした歴史観を披露する。ブルックスがアイルランドに対して使った“backward-looking”という語とテイトの“backward glance”という語の近さは、イエイツが属しているとされる伝統的社会アイルランドとアメリカ南部がここでもパラレルな関係を結んでいたことを示しているだろう。

テイトにとっては、イエイツは近代のなかで近代と対決する存在だった。テイトは詩における近代とそうでないものを分けようとするなら、イエイツの詩“The Second Coming”と“In Memory of Major Robert Gregory”の2つの詩が好例であり、それらは第1次大戦が勃発した1914年以前には書かれ得なかったと言う。

If . . . I am to arrive at a critical distinction that will oppose modern to unmodern, I shall have to start over again, and risk the impropriety of alluding to my own experience. I first began to read the “Later Yeats” in the early nineteen-twenties. I remember as if it were yesterday the impact of “The Second Coming” and “In Memory of Major Robert Gregory.” . . . At a glance the poems looked quite conventional. . . . Yet the two poems by Yeats could not have been written before 1914. I felt at once that here was a poet with whom, by hard labor, I might make myself contemporary. (Tate 224-25)

また、“The Second Coming”における近代を論じた下りは、冒頭の鷹が鷹匠を見失う一節を「一体性が失われたことの象徴」だと述べ、テイトは「一体性」の有無が近代と前近代を分けるとする<sup>9</sup>。

一方で“In Memory of Major Robert Gregory”を論じた箇所は、テイトの言う統一性をより詳しく読む手がかりとなるが、彼の論じ方はかなり独特なものである。テイトはまずイエイツが自らの循環史観を体系化した *A Vision* を評価するものの、それは *A Vision* が何かしらの哲学的世界を展開しているためではなく、一般的に考えられているような哲学的な体系はそこにはないのではないかとさえ言っている。“*A Vision* has been described by more than one critic as a philosophy . . . but I doubt that it is a system of philosophy” (Tate 305). テイトはジャイアー (gyre) やダイモン (Daimon) といった *A Vision* 特有の専門用語に大した興味を示していない。

テイトが関心を表すのは、詩のなかで体系自体が個別へ吸収され、それ自体がもはや象徴として働くのではなく、潜在的に象徴となるべき素材として言葉と同化している状態である。“It is clear visually with the aid of the diagrams; but when Yeats complicates it with his Principles and Daimons, and extends the symbol of the gyres to cover historical eras, visualization breaks down. It is an extended metaphor which increasingly tends to dissolve in the particulars which it tries to bring together into unity” (Tate 306). つまり、テイトは、このように象徴が個別具体的なものと取って代わられるイエイツの詩に価値を見出しているのだ。“In Memory of Major Robert Gregory”では、“it must not be assumed that Yeats on this occasion turned off the system; it must be there. . . . It has been absorbed into the concrete substance of the poem; the material to be symbolized replaces the symbol, and contains its own meaning” (Tate 306-7). “In Memory of Major Robert Gregory”の言葉は何かを明示したりせず、象徴として理解できるものもなく、潜在的なメタファーであり続ける。

テイトは、このように象徴が個別のものなかに溶けてしまっているイエイツの詩が“a poetry which I believe is nearer the center of our main traditions of sensibility and thought than the poetry of Eliot or of Pound” (Tate 309) とし、エリオットやパウンドの詩よりも感性と思考の伝統の中心により近いとする。この感性と思考の伝統とされるものは、エリオットが定式化した、形而上詩人まで保たれていた感性と思考の合一を指していると思われる。エリオットによれば、テニスン (Alfred Tennyson) やブラウニング (Robert Browning) は思考することはできたが感性と思考が分離した時代を生きており、ダン (John Donne) のようにバラのにおいがかぐが如く思考を感じる、つまり感性と思考が一体となった状態にはない——“Tennyson and Browning are poets, and

they think; but they do not feel their thought as immediately as the odour of a rose. A thought to Donne was an experience; it modified his sensibility” (Eliot 287). エリオットにとって感性と思考の分離が起こったのがすなわち近代なのであり、テイトはそうした背景をもとにイエイツの詩で感性と思考の一体が保たれていると考えていたのだろう。

テイトとエリオットが主張する感性と思考の伝統が果たして存在するのかを問うこと自体は、大して重要ではない。こうした「伝統」なるものが、必ずしも過去から現在へと脈々と続いているものではなく、近代の一時期に作られたものだとする認識は、歴史家エリック・ホブズボーム (Eric Hobsbawm) らが編集した論文集 *The Invention of Tradition* の出版以降、人文学や社会科学において一般的になりつつある。むしろ注目すべきは、テイトが、“In Memory of Major Robert Gregory” を感性と思考の両方を兼ね備えたもの、どちらかに分離してしまえば理解できるものではないと見なしていたことにある。テイトにとってイエイツの詩はモダンな詩でありながら、近代到来以前の感性と思考が一体の状態に到達していると考えられていた。

### 3. 終わりに

ダムロッシュ的な世界文学の地図においては、作品を生みだした元の文化と受入側の文化の二点が引っ張り合い、受容に屈折が起こると想定される。アメリカ南部詩人によるイエイツの読解は、その意味では屈折が起こっていたと言えるだろう。イエイツにおいて近代 (“modern”) という言葉は必ずしも混沌や卑俗さのみを意味しないにもかかわらず、新批評のクレアンズ・ブルックスにおいては、あたかもイエイツ自身が伝統の側に位置し、近代との対立という分かりやすい図式のなかで理解されていたが、それは南部の白人詩人が抱えていた伝統と近代という対立の構図に落とし込まれていたからだった。しかも、作者の背景を読み込まないという前提をかかげていたはずの新批評が、イエイツと彼が属すアイルランドに前近代という文脈を加えたうえのことだった。実際に、アングロ・アイリッシュとしてのイエイツはその伝統に馴染むことができず、後期の詩では古代ケルト性という要素はますます後退していくにもかかわらず、相変わらずイエイツはアイルランドの伝統主義者として語られたことになる。アレン・テイトにおいて、イエイツは第1次大戦後の世界、欧米におけるこれまでの身分制度や価値観が崩壊した世界にあっても、近代以前にあった感性と思考の一体が、彼の詩のなかでは維持されていると考えられた。ブルックスとテイトにとって、イエイツはまさにモダンが極まった時代にあって、前近代的な調和を提示しようと孤軍奮闘した詩人として受け入れられたのである。

注

1. 例えば、カトリックが多数派であるアイルランド自由国（1922-1937）において、プロテスタントの家系であるイエイツは、カトリック系保守の雑誌 *Catholic Bulletin* からノーベル文学賞受賞を“the Stockholm dole”と蔑まれ、彼の性的な描写のある詩がたびたび非難されてきた（McCormack 316-17）。
2. 近年のイエイツ全集の編者や論文集の執筆者のほとんどは、アメリカ合衆国やイギリスの研究者たちである。
3. 南部作家によるイエイツの受容を近代性の観点から議論した重要な先行研究に、スティーヴン・マシューズの *Yeats as Precursor: Reading in Irish, British and American Poetry* がある。ここでマシューズは、イエイツが指摘した、言語の意味を満たせないという不安、ポール・ド・マンがイエイツの詩に見た意味の決定不能性などを引き合いに出し、主にポスト構造主義的な不確実な近代という視点で、イエイツによる南部詩人への影響を論じている（Matthews 146-63）。
4. 例えばウィリアム・プラット（William Pratt）はフュージティヴが政治性を持たないためにアグレリアンと同一視されることに異を唱えている——“The Fugitives and the Agrarians were two separates schools, one of which was exclusively literary, the other just as exclusively social and political. The Agrarians were not organized until after the Fugitives had disbanded, and then they included only four members — albeit the major ones — of the previous group: Ransom, Davison, Tate and Warren”（Pratt xxxiv）。
5. 「モダニストとしての『フュージティヴ』詩人から保守反動的とも言える農本主義者になったランサム、テイト、デイヴィッドソン、ウォレンは、そこに若いクレアンズ・ブルックスを加えた形で南部ルネッサンスをアメリカ文学の正典にすえ、新批評を制度化する。この『フュージティヴ』＝農本主義＝新批評」の結びつきと変転は、ただし、それほど矛盾に満ちたものではない。…そもそも「逃亡者」を意味する雑誌『フュージティヴ』の詩人としての彼らは、その創刊号の巻頭で「旧南部の上流エリート」階級、あるいはそうしたものが象徴するセンチメンタルな文学慣習から逃げ、むしろ T・S・エリオットの言うような「伝統」を継承するものとしてのモダニストであったからである」（越智 136）。
6. テリー・イーグルトン（Terry Eagleton）による文学理論の概説書 *Literary Theory* は、理論の史的な位置づけでもあり、この書によれば、戦間期から第2次大戦後にかけて、はじめて登場した文学理論の一つとして隆盛したのが新批評である（Eagleton 40）。

7. なお、南部白人にとって南部社会が持っていたとする「一体性（全体性）」（“wholeness”）、外部の要因に左右されず自発的に生成する状態（“spontaneity”）とは、新批評が文学作品に求めた価値とほとんど同じと言ってよく、この点でもフュージティヴから新批評への連続性が見て取れる。
8. “Yet we were somehow within the general Southern tradition in having attachments that could be taken as a matter of course. We were not detached — not completely detached — for we could assume that we belonged in an existing, rather stable society as persons if not as poets. I say this despite the rather too impudent Foreword affixed to the first issue of *The Fugitive*, in which we lightly announced that ‘The Fugitive flees from nothing faster than from the high caste Brahmins of the Old South’” (Davidson 5).
9. “the opening lines of “The Second Coming”: and they make enough sense apart from our knowledge of the system; the gyre here can be visualized as the circling flight of the bird constantly widening until it has lost contact with the point, the center, to which it ought to be able to return. As a symbol of disunity it is no more esoteric than Eliot’s “Gull against the wind,” at the end of “Gerontion,” which is a casual, not traditional or systematic, symbol of disunity” (Tate 309).

#### 引用文献

- Auden, W. H. *Collected Poems*. Edited by Edward Mendelson, Vintage Books, 1991.
- Bloom, Harold. *The Anxiety of Influence*. 2nd ed. Oxford UP, 1997.
- Brooks, Cleanth. *The Well Wrought Urn*. 1947. Harvest Book, 1975.
- Damrosch, David. *What is World Literature?* Princeton UP, 2003. (デイヴィッド・ダムロッシュ『世界文学とは何か?』秋草俊一郎他訳、国書刊行会、2011年)
- Davidson, Donald. *Southern Writers in the Modern World*. U of Georgia P, 2010.
- Eagleton, Terry. *Literary Theory: An Introduction*. 2nd ed., Minnesota UP, 1996.
- Eliot, T. S. *Selected Prose of T. S. Eliot*. Faber and Faber, 1975.
- Hobsbawm, Eric and Terence Ranger, editors. *The Invention of Tradition*. Cambridge UP, 1983.
- McCormack, W. J. *From Burke to Beckett: Ascendancy Tradition and Betrayal in Literary History*. Cork UP, 1994.
- Matthews, Steven. *Yeats as Precursor: Reading in Irish, British and American Poetry*. Macmillan Press, 2000.
- Pratt, William, editor. *The Fugitive Poets*. J. S. Sanders, 1991.
- Tate, Allen. *Essays of Four Decades*. ISI Books, 1999.
- Warren, Robert Penn. “A Conversation with Cleanth Brooks.” *The Possibilities of Order: Cleanth Brooks and His Works*, edited by Lewis P. Simpson, Louisiana State UP, 1976, pp.1-124.

諏訪：アメリカの“filthy modern tide”——南部の新批評にとってのモダニティーと W・B・イエイツ

Yeats, W. B. *Autobiographies*. Edited by William H. O'Donnell and Douglas N. Archibald, Macmillan Press, 1999.

---. *Later Articles and Reviews*. Edited by Colton Johnson, Macmillan Press, 2000.

---. *Later Essays*. Edited by William H. O'Donnell, Macmillan Press, 1994.

---. *The Variorum Edition of the Poems of W. B. Yeats*. Edited by Peter Allt and Russell K. Alspach, Macmillan Press, 1957.

越智博美『モダニズムの南部的瞬間——アメリカ南部詩人と冷戦』研究社、2012年。

諏訪友亮「カウンター・アイルランド——W・B・イエイツと自由国の教育」、

『早稲田大学大学院文学研究科紀要』2011年（第57集）、19-30頁。